

協定海外留学プログラム：1 セメスタープログラム

留学先大学：フリードリヒ・アレクサンダー大学エアランゲン=ニュルンベルク（ドイツ）

芸術学部 デザイン・工芸学科 工芸専攻 陶コース 3年次

M・Fさん

私は2016年の9月から2017年の3月までドイツのニュルンベルクに留学していた。この半年で体験した事は本当にたくさんあって、思い返すのが大変だ。

まず日本以外の国に行くと異なるのは言葉である。私は事前に日本でドイツ語を勉強してはいたが、授業の内容が分かるほどのレベルではなかった。学校に通い始め授業が全てドイツ語で行われると知ってからは追いつくだけで大変だった。しかしドイツ語の語学の授業を受け始めてだんだんと理解が出来るようになった。この徐々に言葉が理解出来ていく感覚は日本では決して味わう事の出来なかった感覚であり、新鮮だった。徐々に先生や友達とコミュニケーションが取れるようになっていったのも嬉しかった。コミュニケーションが取れるようになるとより語学が向上し、今までは英語で伝えようとしていた事がドイツ語で伝えられるようになったり、彼らも英語で話をするよりもドイツ語で会話をした方がより友好的に会話をしてくれたりして、徐々に日本以外の国に馴染んでいく感覚も面白かった。もちろん分からなくてもどかしい事もあるけれど、その分、分かる事があるというのも嬉しかった。

また以前から美術館に関心があり、学芸員の資格を専攻している私には様々な国の美術館に足を運べる事は素晴らしい体験であった。日本で展示を行う際にはまず地震が起こるという前提で展示方法や設置場所を考えなくてはならない。その為やりたいプランが安全上の問題で実現する事が出来ないという事もしばしば起こる。その為地震が滅多に起こらないヨーロッパ各国の美術館での展示方法は私にとってすごく刺激的なものだった。大きなガラス製の棚の上に繊細なグラスが置かれていたり、日本では考えられないような想像し難い展示を見ることができて考えの幅が広がった。また、日本では滅多に見る事の出来ない各地の収蔵作品を数多く鑑賞することが出来たのも素晴らしい経験のひとつだ。

そうした中で、もっとも私が感動したことは毎日必ず新しい発見があるということだ。授業の中のセンテンスや、日常の何気ない会話の中の友達の使うフレーズ、スーパーで売られているものひとつだって私には刺激的だった。日本では生活する、毎日生きるという事に慣れていて、毎日たいして考えなくてもこなせることばかりだった。言葉や文化が分かり、そして納得出来るということが大きかったとは思いますがそれには日本人特有のメンタリティのひとつ“察する”という文化も大きく作用していたのではないかなと今なら分かる。日本人は相手が今何を考えているのか、相手の感情を読もうとする努力を会話の中や行動においてすると思う。しかしドイツではもちろんそんな事は無くてなんとなく理解して欲しいなあと思っても自分で声に出さないと伝わらない。また基本的に全員が自分の事を一番に考えて生活している為、相手の気持ちを考えるという発想、文化が無いのだろう。もし何か

考えていたり、希望する事柄があれば、それを言葉にするのが当たり前だからだ。日本で暮らしていると当たり前過ぎて意識した事が無いような事に気づく事が出来たということも良い経験になった。また、こうした異なるメンタリティを現地で自分自身感じ取れた発見は今まで、生まれ育った日本という場所で長く暮らしていた私にとってはとても新鮮なことだった。

自分の生まれ育った国以外で長期間、生活するという体験は自分の想像をはるかに上回る出来事に満ちていた。そしてこれらの経験は私の人生においてとても大きなものになるという確信がある。また4年生に上がる前のタイミングで卒業制作についてもたくさんの刺激を得ることが出来た。これからもドイツでの留学で得た経験を大切にしていきたい。